

琉球大学学術リポジトリ

島々はつながっているー古地図のなかの海域世界ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2012-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 公明, Takahashi, Kimiaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002006793

島々はつながっている —古地図のなかの海域世界—

Islands Inter-connected: Maritime World in Old maps

高橋 公明*
Kimiaki Takahashi

1. 開発と地域の歴史

いかなる開発であれ、開発しようとする意志、あるいはその行為は、常に新たな考え方との接触、そしてその受容を伴う。しかし、見逃すことができないのは、その新たな考え方を受け入れる素地が開発の主体にあることである。さらに、その素地そのものも、過去の新たな考え方との接触によって形成されてきたもので、現在のある地域の開発可能性はそのような歴史を通じて培われたものである。この考え方は逆方向にも成立する。言い換えれば、ある地域で生まれた考え方が、外部との接触によって他の地域で受け入れられ、開発しようとする意志に組み込まれるということである。観光開発という観点から、ある地域の資源について考える場合も同じで、当該地域内部の文化的あるいは物質的な資源を見るだけでなく、他の地域にある資源のなかにも、本来は当該地域から伝播した要素があるのではないかというような見方をする必要がある。

2. 古地図のなかの島々

ここでは、海域世界、そのなかでも島々について、古地図を素材に考えるが、東アジアの古地図の多くは、陸地の権力、朝鮮王朝、中国の明・清王朝、江戸幕府、島津家中などが地図製作者に命じて作成したものである。したがって、海を含めた地域の描き方の基調に陸から見た海の観念が投影される。例えば、16世紀の明代に出版された中国の地図帳『広輿図』第4版(1566)の「四夷図」には海のなかに地形のある島が一つも描かれていない。ただ三つの長方形の枠が置かれ、そこに「日本東海東夷亦名倭」、「琉球東南海中島夷」、「南海貢賦之國占城等凡六」と記述されているだけである。現実に外交関係がある国々の地形にすら関心がないことを示している(図1)。これは東アジア起源の地図の特徴の一つで、海への関心の薄さを物語っている。

図1: 「四夷図」(『広輿図』4版、1566年、ハーバード大学燕京図書館蔵)



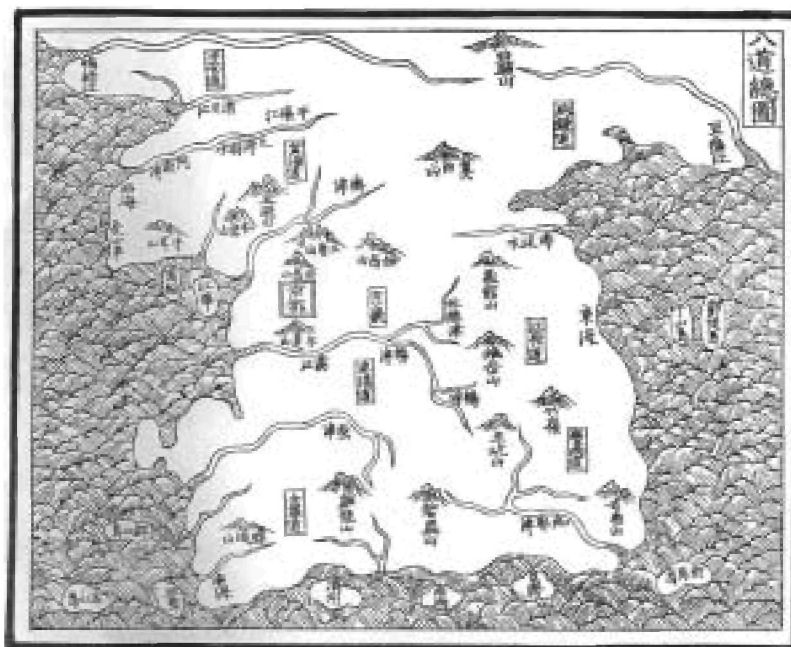
* 名古屋大学大学院国際開発研究科

しかし、注意深く観察することによって、このような地図からも島人の声を聴くこともできる。ここでは陸の権力が海をどのように捉えようとしたのか、そしてその結果として、海域世界からどのような考え方を受け入れたのかを検討する。これは地図という文化資源の特性で、作成主体が属していない地域を含んだ地図を作る場合、何らかの方法でその地域の情報を獲得しなければ成立しないものだからである。

東アジアの海域世界にはいくつかの注目すべき島々がある。対馬島は陸地の権力としては室町幕府、江戸幕府のような日本列島で成長した政治権力の支配下にあったが、島人にとって最も重要な活動が交易・漁業など海に関わるものであったため、朝鮮王朝とも深い関係を結び、朝鮮王朝から認可された活動の利権をテコに宗氏など対馬島の勢力は自らの権力を強化した（高橋公明、1987）。

このような歴史は、朝鮮王朝を版図とし、朝鮮で作成された地図に影響を与える。ほぼ例外なく、対馬島を朝鮮の版図の一部として描いているのである。例えば、『新增東国輿地勝覧』所収の「八道総図」では朝鮮半島を囲むように「喬同」「江華」「黒山島」「済州」など11島が描かれているが、そのなかに「対馬島」が何の違和感もなく配置されている（図2）。なかには日本で出版された朝鮮地図のなかでも対馬島が含まれている例がある。もちろん、日本で作成された朝鮮と日本の両者を含む地図では、通常、対馬島は日本の地図のなかの地形に修正される。いずれにせよ、海を介した対馬島との関係が、朝鮮の支配者をしてこの島を朝鮮王朝の版図のなかとする観念を生み出し、地図に投影されることとなった（Kimiaki Takahashi, 2006）。

図2：「八道総図」（『新增東国輿地勝覧』国書刊行会、1986年）



済州島は耽羅王朝時代を経て、12世紀初頭に高麗王朝の支配地域となったが、それ以後も半島とは独自の歩みをし、とりわけ13世後半から14世紀後半にかけて元の直轄牧場が営まれ、モンゴル系の人々も島人となり、ときには高麗の支配を拒否して反乱を起こした。朝鮮王朝になっても、しばらくは伝統的勢力の島人への影響力は大きく、名実ともに朝鮮王朝の一地域になったのは15世紀半ば以降である（高橋公明、1992および2004）。

古い済州島の地図からは二つの目立つ特徴を指摘できる。第1に、南を上にして北を下にしている。朝

鮮の地図作成は中国のその強い影響を受けており、ほとんどの地図は北を上に行っている。朝鮮の地図で南を上にするのは、済州島以外には日本図と琉球図である。したがって、内部から外部、あるいは中心から周縁を見るという観念が想定できる。第2に、済州島を中心に、朝鮮半島南岸、日本、琉球をはじめ、中国沿岸、東南アジアなどが囲んでいる構図となっている（図3）。第2の特徴は、元々朝鮮王朝の世界観に内在したものではなく、済州島の海域世界でのあり方が、行政官として済州島に赴任する政治エリートを媒介として地図作成に反映したものである。地図の描き方によって、漢城の権力にとって重要な港と済州島人にとってのそれが明確に区別されていることが確認できる（高橋公明、2003、および2008）。

図3：「漢拏壯曠」（済州市『耽羅巡歴図』2000年）

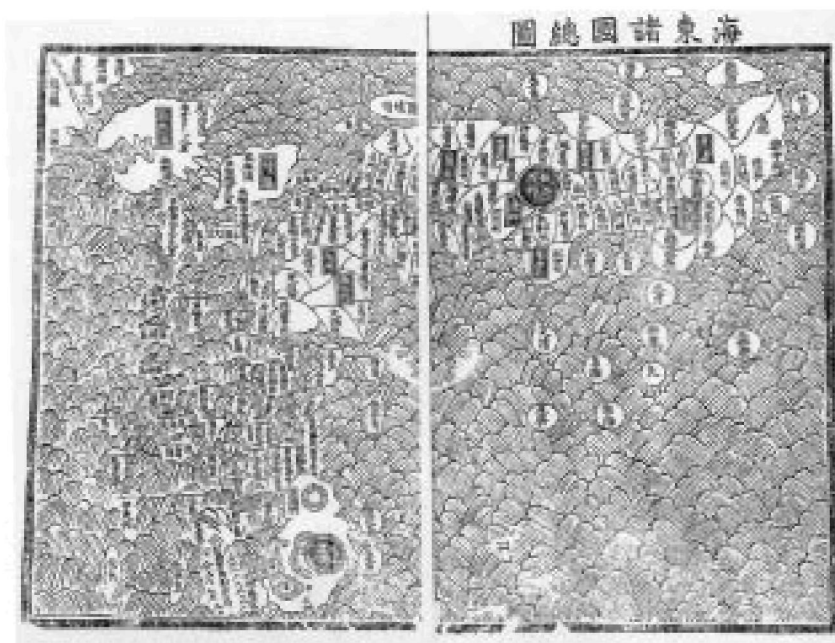


3. 海域世界のなかの琉球

対馬島が日本と朝鮮の境界に位置することによって、朝鮮の地図のなかで、あたかも内部であるかのように表現されるようになり、済州島はその独自性のため、朝鮮王朝の行政に密接に組み込まれた後も、長い間、朝鮮の周縁であるとともに海域世界の重要な島であるかのように表現された。一方、琉球王朝は海域世界のなかで王朝にまで成長したという特徴があり、当然、それは地図に反映された。

1471年に朝鮮で印刷された『海東諸国紀』には、東アジアの海域世界についての視覚的な世界観を表現した「海東諸国総図」が収められている（図4）。これだけの広い範囲を一枚の地図に描いたのは、当時としても画期的で、多くの素材を提供した日本でもなしえなかったことである。とりわけ、朝鮮半島の南端を含めたことは、朝鮮と海東諸国を連続的に見ようとする地理観を表現しており、大きな意味を持つ。また、それに加えて対馬島・老岐島・九州、そして多くの島々を経由して琉球にいたる海域を一つの連続面として表現しえた意義も大きい（高橋公明、2010）。「海東諸国総図」は、そもそも「日本本国之図」、「日本国西海道九州之図」、「日本国一岐島之図」、「日本国対馬島之図」、「琉球国之図」という五種の地図を合成したもので（田中健夫、1997）、「日本本国之図」以外の4図は、博多の貿易僧道安が1453年に琉球使として朝鮮にもたらしたものと推定されている（東恩納寛惇、1969）。それらの縮尺、性格の異なる地図を合成して1枚の地図にまとめるという行為に、当時の朝鮮人エリートの海域世界への強い関心を見ることができる。

図4：「海東諸国総図」（朝鮮総督府『海東諸国紀』1933年）



そして「琉球国之図」（図5）には、九州から沖縄本島までを、おもな島々だけでなく、現在の三島村、十島村域の小島まで描き、かつ、海路も引いてあり、通常、陸の権力がほとんど関心を持たない海域世界の細部が書き込まれている。また、「琉球国都」、「宝庫」、「国庫」など王朝に直接関わるものがらだけでなく、「賀通連城」など様々なグスクが表記され、さらには「港口」に「江南・南蛮・日本の商船の泊まる所」など琉球にとって重要と観念することが詳細に表現されている。漢字の表記の特徴から、この地図は日本人によって作成された可能性が高いが、地図のなかの情報は琉球人からもたらされたもので、結果的に琉球人の世界観がこの朝鮮製の地図に投影されることになった。

『広輿図』という中国の地図帳がある。1555年に初版が刊行され、以後、1799年の7版まで版を重ね、中国の地図学史のなかでも重要な位置を占める地図帳である。「琉球図」(図6)は1561年の3版から追加された地図で、これまで中国の地図では地形を伴って表現されてこなかった琉球王国が具体的に表現されたものである。『海東諸国紀』の「琉球国之図」の詳しさには及ばないが、首里城の描写が詳しく、福建への航路、「泊船之所」、「迎恩亭」、「天使館」など中国との関係で重要と思われる海域世界に関する描写が目立つ。ここにも琉球人エリートの世界観が中国製の地図帳に投影され具体例を見ることができる。

図5：「琉球国之図」(『海東諸国紀』同前)

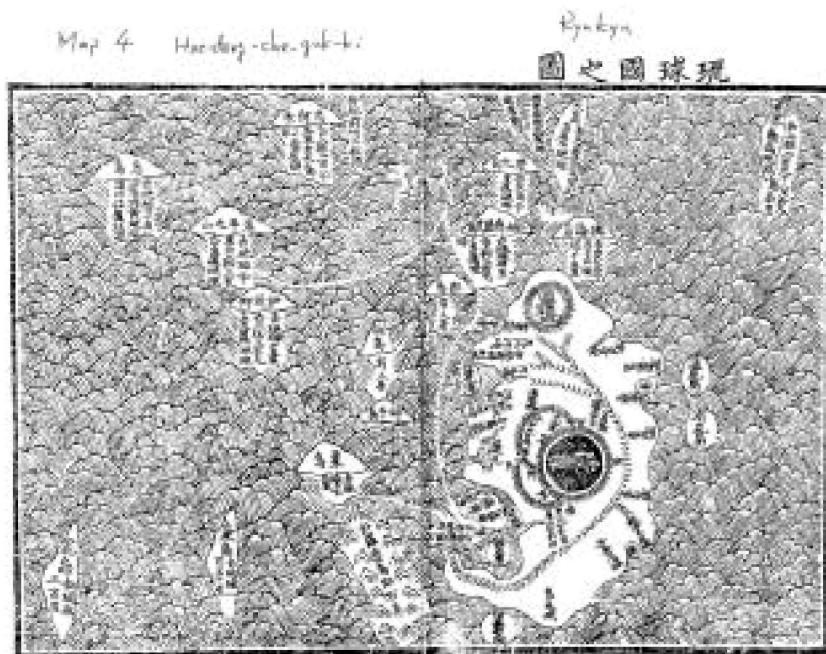
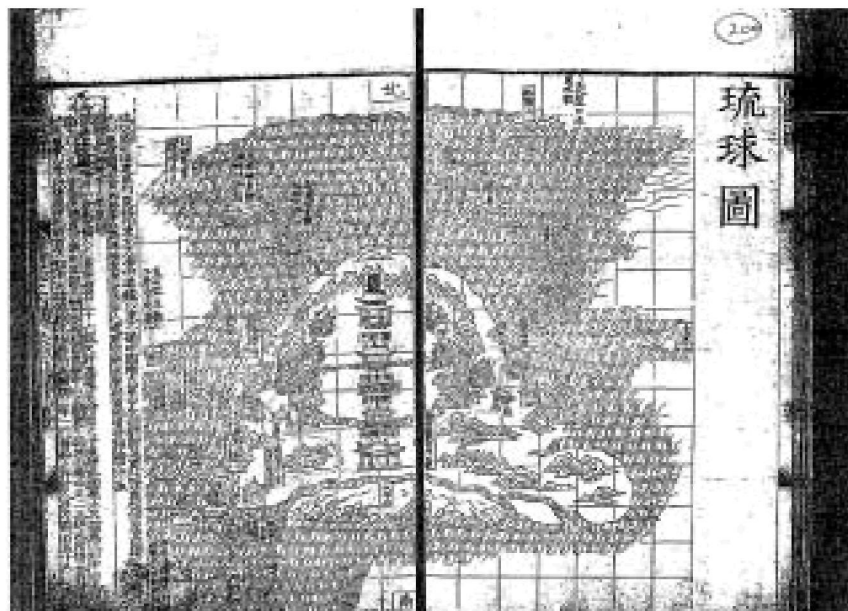


図6：「琉球国図」(『広輿図』第4版、1566年、ハーバード大学燕京図書館所蔵)



4. 地図テキストのなかの言説

当然のことながら、地図のなかでもっとも強く、明確に表現されるのは地図作成者の観念である。地図作成者の言説と言い換えてもよい。しかしながら、ほとんどの地図、とりわけ海を含んだ地図には、作成者がもともと概念化した情報を超えたものが含まれている。それらが地図上に表現されるとき、地図作成者が意図していたか否かは関係なく、新たな言説が表現されるのである。朝鮮で作成された『海東諸国紀』の「海東諸国総図」、「琉球国之図」、明で作成された『広輿図』の「琉球図」は海域世界で生きている人々の観念が豊富に表現されている。

参考文献

- 1) 高橋公明 (1987) 「朝鮮外交秩序と東アジア海域の交流」 『歴史学研究』 573号、66-76頁。
- 2) 高橋公明 (1992) 「中世の海域世界と済州島」 網野善彦等編 『海と列島文化 4 東シナ海と西海文化』 小学館、163-205頁。
- 3) 高橋公明 (2003) 「テキストとしての済州島地図」 (研究代表者荒野泰典『グローバル化の歴史的前提に関する学際的研究』 平成12年度-平成14年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(2) 研究成果報告書)
- 4) 高橋公明 (2004) 「海域世界の中の済州島と高麗」 『立教大学日本学研究所年報』 3号、115-124頁。
- 5) Kimiaki Takahashi (2006), Tsushima Island as a Boundary Area, Asian Cultural Studies, No. 32, 27-42.
- 6) 高橋公明 (2008) 「済州島における連陸浦と『耽羅巡歴図』のなかの港」 (研究代表者村井章介『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』 平成15年度-平成19年度科学研究費補助金・特定領域研究・特別研究促進費 研究成果報告書) 72-82頁。
- 7) 高橋公明 (2010) 「『混一疆理歴代国都之図』と『海東諸国総図』」 『日本の対外関係 4 倭寇と「日本国王」』 吉川弘文館。
- 8) 田中健夫 (1997) 「『海東諸国紀』の日本・琉球図」 『東アジア通交圏と国際認識』 吉川弘文館、102-147頁。
- 9) 東恩納寛惇 (1969) 「朝鮮との交通」 『黎明期の海外交通史』 琉球新報社 (初版1941年)、37-158頁。